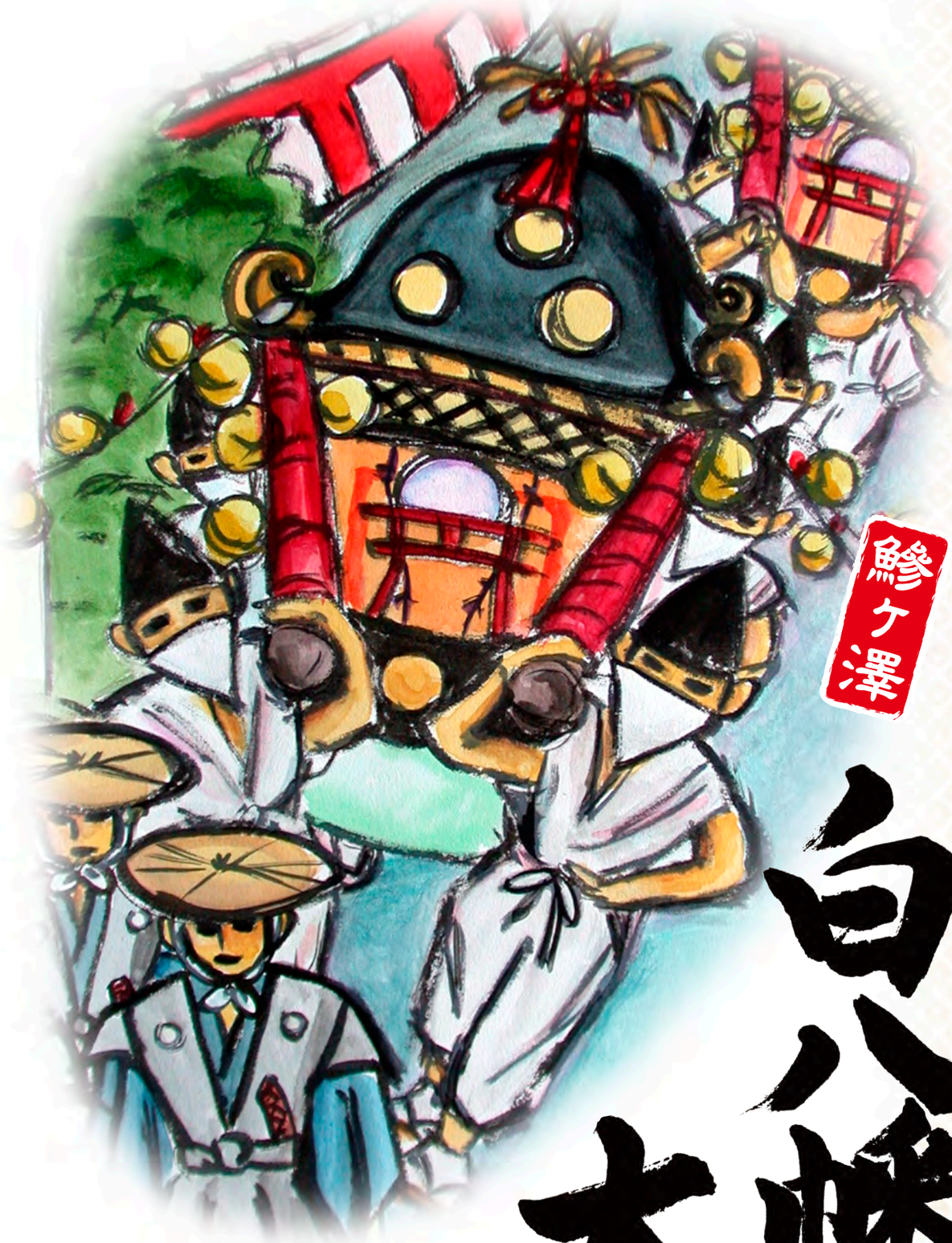


鰺ヶ澤

白八幡宮大祭

津軽の京祭り

白八幡宮大祭は、本殿の御神体を神輿に遷して、町内を巡幸する「神幸祭」の様式で行われる祭りである。

白八幡宮大祭の全容

写真で見る祭り

日本海に面した港町鰺ヶ沢では、4年に一度、8月14日から16日にかけて「白八幡宮大祭」が繰り広げられる。大祭は、北前船の交易によって上方から伝わったとされる京風の祭りの伝統を今に受けついでいる。「津軽の京祭り」とも呼ばれる華やかな祭りの全容を、平成21年に行われた大祭の写真から振り返ってみよう。

目次

1 白八幡宮大祭の全容
写真で見る祭り

8 鰺ヶ沢湊と白八幡宮

10 津軽の京祭り 白八幡宮大祭
コラム① 御神輿の寄進札

12 祭りを支える仕組み

14 神輿渡御行列 絵巻

18 祭典と日程
遷座祭・発輿祭・着輿祭・宵宮・海上渡御・塩釜神社参拝・本殿還幸祭

渡御のしきたり

20 行列の順路

22 大祭今昔 ～白八幡宮大祭の歴史～
江戸時代の祭礼・近代における大祭・白八幡宮大祭の現在
コラム② 御神輿が結んだご縁 ～大祭と願行寺～

28 御旅所

29 各町内の山車
町名の由来 ／ 田中町 七ツ石町 二丁目米町 一丁目 浜町 釣町 漁師町 新地町 富根町 淀町

36 新町のカシ祢宜　塩釜神社御神楽

38 なつかしの山車

40 白八幡宮大祭と芸能
チャンチャレンコ・夜神楽・恵比寿舞・奴の祝い言葉
コラム③ 映像の中の白八幡宮大祭

港町・鰺ヶ沢 歴史マップ

写真で見る祭り

白八幡宮
大祭の全容

神幸祭を終えて神社にお還りになった御神輿は、境内を3周して御神庫に納まる。御神輿は2基あり、白八幡宮の御神体と、合祀されている白鳥大明神の御神体とが安置されている。

御神輿から御廉車に遷されたご神体は、町内を巡幸して、神職による奏楽のもと、神社本殿にお還りになる。本殿還幸祭。

山車には、鉦・太鼓・笛・三味線の囃子方が乗り込み、優雅な祇園囃子を奏でる。主役は鉦たたきの女の子たち。

花笠に浴衣姿の女の子たちは、囃子にあわせて夜神楽（よかぐら）を踊る。踊りや舞は、祭り期間中、町内のいたるところで催される。

山車では各町内の子供たちによる伝統芸能が披露される。陣羽織を羽織った勇ましい男の子たちが、チャンチャレンコを踊る。

写真で見る祭り
白八幡宮大祭の全容

新町・塩釜神社の御仮殿では、演者も囃子方も全て子供たちによる「カシ祢宜（ねぎ）（神楽）」が行われる。安永9年（1780）に奥州仙台の塩釜大明神から伝わったとされる伝統芸能である。

神輿渡御（みこしとぎょ）には、露払いを先頭に、行導師、社名旗（はたし）、吹き流し、御鉄砲、御太刀、御弓、御薙刀、御白旗などを捧持する人たちが従い、古式ゆかしい装束を身にまとった時代絵巻が繰りひろげられる。

大祭1日目の夜、御神輿は、鯵ヶ沢漁港に設けられた御旅所（おたびしょ）に安置され、夜には神職による神楽（津軽神楽）が奉納される。

神輿行列の後には、各町内の華麗な人形山車（やま）が連なって運行される。山車には各町内の自慢の人形が飾られる。

写真で見る祭り

白八幡宮
大祭の全容

大祭3日目、御神輿を御座船（ござぶね）に遷して海上渡御が行われる。海上安全・大漁祈願のため鰺ヶ沢湾を航行する。その後を、大漁旗をはためかせた漁船が多数付き従う。

大祭3日目、御神輿行列は1日目とは違う順路で進み、町内の古い道筋にしたがって巡幸する。

山車の上には各町内ごとの人形が飾られ、後ろには見送りがついている。下には囃子方が乗り込み、祇園囃子を奏でながら町並みを行く。

山車で奏でられる囃子は、各町内で代々受けつがれてきた。優雅な囃子が、祭りの雰囲気を盛りあげる。

御神輿は、「鳳輦（ほうれん）」（前方）と「葱華輦（そうかれん）」（後方）の2基が巡幸する。それぞれ、田中町と漁師町の漁師が代々担ぐしきたりになっていた。

鯵ヶ沢湊と白八幡宮

江戸時代の鯵ヶ沢湊は津軽藩の御用港として青森、深浦、十三湊とともに津軽四浦の一つに数えられていた。大坂、越前、加賀、越中をはじめ諸国の北前船（弁財船）が出入りし、津軽藩の米を大坂へ送り出すための積み出しが行われたり、各地の湊から運ばれてくる大量の物資を扱うなど、宝暦年間（1751～1764）には廻船問屋などの大きな蔵が12棟も建ち並んで殷賑を極めた。町の中心部には出入りの船を取り締まる「湊目付」・「沖横目」のほか、町奉行所も置かれて地方の政治経済の中枢としての役割を担っていた。

白八幡宮は、古くから浪岡と弘前の八幡宮とともに津軽三八幡の一つといわれ、鯵ヶ澤総鎮守として湊を真下に見おろす丘の中腹に鎮座している。境内に入ると北前船による海運の隆盛や航海の安全を祈願した人々の信仰の深さが伝わってくる。この船主や船頭たちが奉納した多くの船絵馬は藩政時代から明治にかけての海運を知る資料として貴重である。大坂の絵馬師たちによって描かれ、その構図の大胆さや鮮やかな色彩は当時の絵師の力量をうかがわせ、今もほとんど色があせることがない。寛文9年（1669）から文政4年（1821）までは境内に常夜灯が設置され、津軽藩により北前船の入港する期間内（4月1日から10月1日まで）の点灯を命ぜられていたこともあって、白八幡宮と北前船の船人たちとは深いつながりがあった。

境内や参道などには、はるか遠方から北前船で運ばれた石材等がふんだんに使われていて、鯵ヶ沢の交易が広範囲に及んでいたことが再確認できる。当時の北前船は日本海の荒波のなかで船の安定を保つために船底に「重石」（バラスト）を積んで北上した。そのために積み込まれたのが長州（山口県）の赤間関で産出する御影石や、越前（福井県）の笏谷石（福井石または越前青石ともいう）である。本殿を囲む赤間関産の玉垣は文化13年（1816）に、大間屋たちが世話人となって寄進したものである。それぞれの石柱には、北前船の商いに関わった数多くの船主や長者らの名前に混じって、赤間関の石工・長濱有光重兵衛の名前も刻まれている。また、寛政6年（1794）奉納の石灯籠などからは大坂や瀬戸内の塩飽諸島との頻繁な往来の様子がよくうかがわれる。江戸中期から明治にかけての鯵ヶ沢湊における海運は、物資の流通にとどまらずさまざまな文化の交流にも大きな役割を果たしていたことがしのばれて興味深いものがある。

※白八幡宮はしろはちまんぐうとも読まれる

白八幡宮の社殿

鯵ヶ沢湊図絵馬
慶応元年（1865）、大坂の米商人大津屋が奉納した大型絵馬。海上に浮かぶ3艘の北前船、画面の下には常夜灯や米蔵が建ち並ぶ港町の姿が描かれている。大坂の船絵馬師・三代吉本善京の作。

鯵ヶ沢湊の賑わい
山形岳泉筆「合浦山水観」
（青森県立郷土館蔵）より。
鯵ヶ沢本町一丁目の町並み。

白八幡宮大祭絵馬
白八幡宮を出る神輿渡御行列の姿を描いた珍しい絵馬。昭和10年、鰺ヶ沢築港工事の功労者として知られる菊谷亀吉が奉納。

津軽の京祭り

白八幡宮大祭

4年に一度行われる白八幡宮大祭は、古式ゆかしい神輿渡御の行列が町内を巡幸するお祭りで、さらに各町内の華麗な人形山車が供奉し、町をあげて盛大に繰り広げられる。祭りの行列や山車には、北前船交易によって上方から運ばれた文化の影響が色濃く残されており、京都の祇園祭の流れをくむ祭りとして、今なお「津軽の京祭り」と呼ばれるほどの華やかさを誇っている。

白八幡宮大祭の歴史は古く、延宝5年（1677）に、武運長久、領内安全、五穀豊穣、火難消除を願って大祭を執り行うようにという津軽藩の藩命によって始まったとされる。その後、年ごとの開催や隔年の開催などを繰り返しながら明治10年（1877）頃から10数年間の中断を経て、明治23年（1890）に復活し現在に至っている。

この祭りは本殿の御神体を神輿に遷し、巡幸しながら町中を祝福するという「神幸祭」の様式で挙行される。古くからのしきたりとして、御神輿を迎える家々では道筋を掃き清め（近年までは道路に盛り砂や打ち水をした）、家の前にゴザを敷き、机代を置いてお神酒・米・灯明を供えて着座で拝礼するという丁寧なものであった。その姿は今も多くの家々に受け継がれて残っており、祭礼に対する鰺ヶ沢ならではの古い〝伝統〟をかいまみることができる。

行列は、それぞれの所役を担った神職が衣冠を身にまとった乗馬姿で、また、裃姿の神輿警固役や多くの御神宝・御神器を捧持する人々や御神馬などが飾り立てられて厳かに進むさまは古典絵巻になぞらえられ、多くの町民に親しまれている。行列が当日の目的地である御旅所（注1）に到着すると鳳輦・葱華輦（注2）という2基の御神輿を安置し、そこを齋庭（注3）として祭典が執り行われる。御旅所の場所は古くは田中町（水屋やメ二戸沼家）と漁師町（海士町）だったが、後に淀町の豊受美神社などに変更になり、近年は田中町と港の上屋へと再度の変更がなされて今日に至っている。

大祭中は御座船に2基の御神輿を載せて沖へ繰り出す海上渡御もにぎやかに行われる。先導船の舳先に立つ神職が海上を祓いながら進み、御座船では神職による奏楽のもと、厳かに大漁祈願祭、海上安全祈願祭が齋行される。漁港所属のたくさんの漁船などが大漁旗で飾り立て、白波を蹴立てて御座船の後に続くさまは、夏の日本海を彩る壮観な一大絵巻である。

海上渡御が終わると、神輿行列が再開され、各町内の山車は古式ゆかしい伝統のお囃子を奏でながら行列の後に続く。道々では子供たちによるチャンチャレンコ・夜神楽などの踊りが演じられて町中は祭一色に染まる。

こうして、古くからの道筋に沿って町中を巡幸した御神輿がつつがなく本殿にお還りになると、神社では還幸祭（注4）が齋行される。「行導」、「大和楽」の奏楽のなか、御神体を神輿から御廉車（注5）に遷し、警蹕（注6）の発声に導かれて厳粛に本殿（奥の院）へと進む。最後に宮司が御神体を本殿に安置し、還御の祝詞を奏上、玉串を奉奠して大祭を終える。

（注1）御旅所…神社の祭礼に、神輿が本宮から渡御して、仮にとどまるところ。（御仮宮・御仮殿）

（注2）鳳輦・葱華輦…鳳輦は屋形の上に金銅の鳳凰をつけた輿。葱華輦は同じく葱の花をつけた輿。

（注3）齋庭…神を祀るために齋み浄めた場所。

（注4）還幸祭…神が御幸を終えて本社に還幸したとき、神霊を神輿から本殿に遷座する祭。

（注5）御廉車…境内などで神霊を遷すときなどに用いる簡易な輿。（御羽車）

（注6）警蹕…神事のときなどに、先払いが声をかけて周囲に注意を喚起すること。

コラム①

◆ 御神輿の寄進札 ◆

御神輿の寄進札（白八幡宮蔵）

白八幡宮大祭で用いられる御神輿は、貞享2年（1685）に鰺ヶ沢町内の人々によって寄進されたものであるという。このことを物語る御神輿の寄進札が、現在も白八幡宮に残されている。

寄進札は、縦147cm×横45.5cmの大きなもので、寄進者の名前がびっしりと書き込まれており、裏面には貞享2年5月28日の日付がある。ちなみに神輿の本体には、同年3月に下った（注文先から送られたという意味か）ことが裏書きされているので、その日に神社に奉納したのではないかとみられる。

各町ごとに書き上げられた寄進者の名前は総数394名にも及ぶ。上段には、おそらく寄付金額の高い人と思われる当時の鰺ヶ沢湊の船問屋の名前が並んでいる。なお、同じ頃に成立した貞享4年検地帳（弘前市立図書館蔵）によると、この時期、鰺ヶ沢の戸数は410軒である。つまり、ほとんどの全町民が、神輿の寄進のために寄付しあったものと思われる。

歴史ある2基の御神輿は、その後、元禄9年（1696）の白八幡宮の火災からもまぬがれ、今もなお祭りの主役として生きつづけている。

祭りを支える仕組み

図は平成21年における大祭の運営体制を示している。大祭のうち「神幸祭」に係る経費については、各町内会の分担金・寄付金のほか、以前は町からの文化財保存助成金などが充てられていた。

白八幡宮大祭は藩政時代以来、鯵ヶ澤総鎮守の祭として全町民によって支えられてきた祭である。新町のカシ祢宜神楽や各町内の山車、お囃子なども、この祭と一体のものとしてそれぞれの町内が大切に保存し、代々受けついできたものである。

戦後は、神社機構の変更もあって、白八幡宮は本来の氏子である一丁目と田中町（塩釜神社合祀中は新町も含む3町）によって護持されることになった。ただし、4年に一度の大祭だけは、町全体の隆盛と、伝統的な古典文化を継承したいという町民の願いから、旧鯵ヶ沢町内全体の祭りとしての性格を残して運営された。昭和30年の町村合併を機に、新たに神輿巡幸の道筋を延長するなどして、より全町的な規模に近い大祭として位置づけられるようになった。

大祭の運営にあたっては、神社側の準備はもとより、町当局や各町内での取り組みも強化され、主催母体としての「鯵ヶ沢町古典文化保存会」や、町内会連合組織・漁業協同組合及び関係団体による「白八幡宮大祭実行委員会」を立ち上げたりしながら、町固有の伝統文化の存続を目指してきた。

大祭で行われる「神幸祭」は、昭和56年に鯵ヶ沢町指定文化財第1号に指定されて今日に至っている。

開催前年には、氏子、総代が諸準備を進める一方、実行委員会が発足し、大祭開催の作業が進められる。

なお、実行委員会では、各町内の行事である山車運行についても各町内と連絡調整を図りながら進めている。

本番に向け、神社では氏子を中心に御神輿や諸道具を準備し、各町内では子供達が夏休みを迎えた7月後半から、チャンチャレンコと夜神楽の囃子や踊りの練習が行われる。8月に入ると、各町内で山車の小屋掛けも始まり、町は祭り一色となる。

祭りの準備風景

白八幡宮の歴史

●主祭神　譽田別命（ほんだわけのみこと）

●略　史

大同2年（807）　坂上田村麻呂が蝦夷降伏祈願所として創建し、大刀と白旗八流を奉納したという。

康元元年（1256）　執権北条時頼が諸国行脚の途中に立ち寄り、荒廃した社殿を再建したという。

慶長8年（1603）　津軽為信（津軽藩祖）のお手元金により社殿を再建。鯵ヶ沢の総鎮守となる。

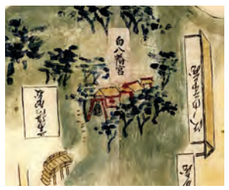
寛文9年（1669）　津軽藩より鯵ヶ沢港口の灯明（灯台）を命ぜられ、境内に常夜灯を建立す。

「合浦山水観」（青森県立郷土館蔵）に描かれた常夜灯。後に白八幡宮から弁天崎に移された。

延宝5年（1677）　武運長久、領内安全、五穀豊穣、火難消除のため大祭が始まる。

元禄9年（1696）　三月十三日の夜、火災が発生。社殿及び古来の宝物、古記録を焼失。ただし神輿殿及び長床は火災をまぬがれ、御神体は神輿殿に臨時に奉遷された。

享和年間（1801～）　鯵ヶ沢町中より津軽藩に対して白八幡宮の町中による運営を申し出て、許可される。


藩政時代の鯵ヶ沢町絵図に描かれた白八幡宮。

文化13年（1816）　八月、大坂の橘屋四郎兵衛、豊島屋兵五郎、境屋利助らが世話人となり、御影石を取り寄せて本殿の玉垣を寄進した。

白八幡宮の本殿を囲む玉垣。諸国の船問屋などの名が刻まれている。

文政12年（1829）　鯵ヶ沢町中にて本殿を建立。

文久2年（1862）　鯵ヶ沢町中にて拝殿を建立。

明治6年（1873）　郷社白八幡宮となる。

昭和3年（1928）　創建千百二十年大祭執行。

昭和32年（1957）　町村合併を記念し、新鯵ヶ沢町として大祭を執行。

平成20年（2008）　創建千二百年祭執行。

神輿渡御行列 絵巻

「白八幡宮大祭御神輿渡御之図」作：畑中 創（昭和 63 年の作品）より。

行列の順序（丸数字は人数）

露払②
運行奉行（前）①
御先払①
徒士②
社名旗捧持者①
＊旗台持①
黒二印旗捧持者②
錦旗捧持者②
＊旗台持②
総代長・実行委員長（乗馬）①
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
赤社紋旗捧持者①
白社紋旗捧持者①
大麻捧持者①
大麻司神職（乗馬）①
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
行導師①
御神楽奉行①
御獅子捧持者②
※神楽司神職（乗馬）①
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
楽人④
＊太鼓・小太鼓運搬人③
五色吹流捧持者②
崇敬者代表（乗馬）①
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
一般警固⑫

ミニ解説

○行列の先頭で行列の進行を通告。
○行列の前方で運行を指令。
○神輿の進行に際し安全を喚起。
○徒歩により行列全体を先導。
＊「白八幡宮旗」。（二旒）
＊（二旒）
＊日・月を表す錦織りの大旗。（二旒）
＊（二台）
○大祭実務の統括。
＊「長柄傘」は朱塗の大傘。（二張）
＊「胡床」（床几）は携帯用腰掛。
＊「口取」「雑役」は馬方。
＊白八幡宮の社紋は「三巴」
＊「大麻」は麻・木綿・紙等の供物。
○大麻（大幣）を司る神職。
＊古代神話の道案内役「猿田彦の神」。
○神楽師・奏楽師を統率。
＊獅子頭は（権現様）。
○神楽奉納を司る神職。
＊奏楽は大太鼓・小太鼓・笛・手拍子。
＊五色の吹き流しは一対。（二旒）
○町長
○行列全般の警固。

衣装

纏衣装
裃・鈍色小袖
裃・鈍色小袖
裃・鈍色小袖
直垂（白）
直垂（白）
雑色（黄）
雑色（黄）
白丁
小袖・裃
白丁
白丁
雑色（黄）
雑色（黄）
白狩衣
祭服
白丁
白丁
猿田彦装束
鈍色小袖・裃
獅子衣装
祭服
白丁
白丁
白狩衣
白丁
白狩衣
裃・山吹小袖
白丁
白丁
青小袖・裃

船名旗奉行①
船名旗捧持者⑧
大榊奉行①
大榊担手④
※大榊守護役神職（乗馬）
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
御神器奉行①
※御神器下知役神職（前）（乗馬）
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
旗鉾捧持者②
御弓奉行①
御弓捧持者⑧
花警固
比礼鉾捧持者②
御楯奉行①
御楯捧持者⑧
御鉄砲奉行①
御鉄砲捧持者⑧
御槍奉行①
御槍捧持者⑧
御神器下知役神職（乗馬）①
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
真榊捧持者②
白旗奉行①
※御神宝守護役神職（前）（乗馬）
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
白旗捧持者⑧
祓主神職（乗馬）①
＊長柄傘持①　胡床持①

＊昔は「船印」、今は大漁旗を使用。
＊「大榊」は常緑の大御神木。（一本）
○神事用大榊を司る神職。
＊「御神器」は神々の宝器・祭具等。
○神幸祭の祭具等を守護する神職。
＊「旗鉾」は神輿警固の武具。（二本）
＊「御弓」は武具としての弓箭（弓矢）
＊弓と矢の一揃いで一具。（八具）
＊行列に参加する稚児の一団。
＊布（飾り旗）をつけた鉾。（二本）
＊「三巴」の社紋入りの楯。（八枚）
＊卍印付き赤袋入り。（八挺）
＊比礼付ボンボ槍。（八条）
○神幸祭の祭具等を守護する神職。
＊「真榊」は太玉串・憑代（神籬）。
○神幸祭に携行の宝物を守護する神職。
＊無地白旗。（八旒）
○災厄・罪障等の修祓を司る神職。

神輿渡御行列 絵巻

行列には、金棒をもった露払いを先頭に社名旗や錦旗などが続く。

2基の御神輿には、それぞれ守護役神職や警固役がつく。

古代神話の神「猿田彦」に扮した行導師が行列の道案内をつとめる。

御楯・御鉄砲・御槍・御白旗などの各奉行と捧持者。

＊乗馬口取①　雑役①
御神宝奉行①
太刀捧持者①
大弓捧持者①
御雨捧持者①
唐櫃持②
御神宝守護役神職（乗馬）①
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
御神馬馬口取①
奉幣捧持者①
※奉幣司神職（乗馬）
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
御神輿奉行（前）①
御神輿守護役神職（前）（乗馬）①
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
御神輿警固⑧
四神鉾（青龍①玄武①）

御神輿（鳳輦）

※一般紋服供奉者⑩
運行奉行（中）①
御神輿担手・脚立持⑫
御神輿奉行（後）①
※御神輿守護役神職（中）（乗馬）
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
御神輿警固⑧

御神輿（葱華輦）

御神輿担手・脚立持⑫
四神鉾（白虎①　朱雀①）
※御神輿守護役神職（乗馬）①
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
※一般紋服供奉者⑩
宮司（乗馬）①
＊長柄傘持①　胡床持①
＊乗馬口取①　雑役①
御先箱担手②
両掛担手①
行器担手①
五穀豊穣旗奉行①
五穀豊穣旗持⑧
御神供奉行①
御初穂係⑧
御初穂箱運搬人②
御幣奉行・押④
運行奉行（後）①

○御神宝捧持者を統率。
＊赤袋入り大太刀。（一振）
＊赤袋入り大弓。（一挺）
＊赤袋入り大薙刀。（一柄）
＊「唐櫃」は神事用の衣装などを運ぶ箱。
○神幸祭に携行の宝物を守護する神職。
＊本来は神社に奉納する生きた馬。
＊「奉幣」は神々に奉る幣帛の意。
○神輿（鳳輦）の進行を指令。
○神輿の前にて守護を司る神職。
○代々大祭を支えてきた旧家の代表。
○神輿と行列の進行を調整。
○鳳輦担ぎ手。（十二人）
○神輿（葱華輦）の進行を指令。
○両神輿の間にて守護を司る神職。
○葱華輦の両脇に供奉し、警固を担当。

【屋形の上に金銅の鳳凰をつけた輿。】

○代々大祭を支えてきた旧家の代表。
○神輿と行列の進行を調整。
○鳳輦の両脇に供奉し、警固を担当。
＊神輿を守護する動物神を表す鉾。
○神輿の後部にて守護を司る神職。
○代々大祭を支えてきた旧家の代表。
○祭具調整・渡御及び大祭中の全祭典の執行と統括。
＊「御先箱」は衣装を入れて担ぐ箱。
＊「両掛」は旅行用行李。（一梱）
＊「行器」は食物を担いで運ぶ三脚器。
（昭和三十二年は四十旒）
＊「御神供」は神々への供物。
＊「御初穂」は御神輿に供えた米・酒。
○行列の後方で運行を調整。
○白八幡宮氏子総代による取締。
○行列の後方で運行を調整。

【屋形の上に金銅の葱花の飾りをつけた輿】
（葱花は縁起物の葱の花の意）

○葱華輦担ぎ手。（十二人）
＊神輿を守護する動物神を表す鉾。
○神輿の後部にて守護を司る神職。

紋服・羽織袴
裃・黒小袖
白丁
裃・黒小袖
祭服
白丁
白丁
裃・白小袖
青狩衣

白丁
裃・黒小袖
狩衣
狩衣
白丁
白丁
狩衣
祭服
白丁
裃・白小袖
祭服
白丁
裃・白小袖
祭服
白丁
白丁
裃・黒小袖
祭服
白丁
白丁
裃・黒小袖
白丁
裃・黒小袖
白丁
白丁
裃・黒小袖
裃・黒小袖

神幸祭の行列には各所役や人員配置数の点で基本となる形があるが、それぞれの時代の情勢によって多少の変化もみられる。ここでは、縮小を余儀なくされた平成21年の形態に基づきながらも、それまでの伝統的な実態を加味して行列の姿を示した。※印は行列縮小以前までの基本となる形態。

昭和32年の大祭は、昭和の市町村合併による「新町発足記念大祭」として、鰺ヶ沢町古典保存会主催、鰺ヶ沢町商工連合会・鰺ヶ沢町協賛の体制で8月14日～16日にわたって挙行された。神職は津軽地域の各神社より11名（延べ14名）を招聘し、御神馬及び神職・総代々表・崇敬者代表等の乗馬用として馬14頭を配置するなど古式に則った行列を連ねた。以後、各大祭ごとに神職の増減はあるが、平成17年の大祭までは10名～14名の神職が奉仕して神幸祭を執り行った。

平成21年の大祭は神職を6名に縮小し、各所役も兼務の形を導入して経費不足や人員不足に対応した。

白八幡宮大祭の 祭典と日程

各祭典の様子については平成21年の大祭から。なお日程は、昭和60年以降、同じ日程で行われている（それ以前については本書「大祭今昔」を参照）。

本殿還幸祭

神幸祭を終えて神社に到着した御神輿は境内を3周して御神庫に納まる。そこから御神体を御廉車に乗せ、警蹕と奏楽のもと、本殿にお遷して大祭の無事終了を報告する祭典。

8月16日

塩釜神社参拝

行列が新町を通る際に行われる。かつて塩釜神社が白八幡宮に合祀されていたご縁から、宮司が馬から降りて正式参拝をする。

海上渡御

御座船に御神輿を遷して鯵ヶ沢港を出港し、海上を航行しながら大漁祈願と航海安全祈願の祭典が行われる。

8月16日・昼

宵宮

大祭1日目の晩に御旅所で行われる。例祭の場合の前夜祭にあたる祭典。

8月14日・晩

着輿祭

御神輿が目的地に着くたびに無事の到着を報告する祭典。

発輿祭

渡御行列に先立ち、境内で参加者全員のお祓いを行い、御神輿の前で巡幸開始の報告と道中の安泰及び無事到着を祈願する祭典。大祭中はその日の巡幸開始に先だってそのつど行われる。

8月14日・昼

遷座祭

渡御行列の前夜に御神体を本殿から御神輿に遷す祭典。暗闇の中で手燭（手に持った燭台）だけの灯りのもとで、口覆いをつけた神職によって行われる。

8月13日・深夜

◆渡御のしきたり◆

◆御神輿の担ぎ手

2基の御神輿を担ぐ役割は、鳳輦を田中町、葱華輦を漁師町と決まっている。代々、漁師の人たちが担ぎ手を務めていた。なお巡幸においては（前）鳳輦、（後）葱華輦の順序で進む。

◆御神輿休止場所

巡幸する道すじの各神社々頭、田中町の水屋、願行寺、田中町の旧御旅所（メ二戸沼家）などが担ぎ手の休息場所。

◆巡幸経路

白八幡宮を中心に町内を上・下に分け、開催年ごとに巡幸開始の方向を交替する。必ず古くからの道筋を守って進むことになっている。

◆口覆い

行列の神輿担ぎ手や神宝・神具の捧持者は白布で口を覆って穢れを慎むという古風なしきたりが残っている。

◆着座拝礼

家の前に茣蓙を敷き、机代をおいて灯明や初穂を供え、家族が着座で神輿を迎えるというしきたりが今も残っている。かつては二階から見下ろすことも慎んだ。

祭りの順路

平成21年
8月14日・16日

神輿渡御行列の順路は、行列初日の目的地（御旅所）の場所によって出発開始の方向が変わり、開催年ごとで交替する。漁港に御旅所（御仮殿）がおかれた平成21年の大祭では、初日（14日）に上町（大和田方面）を巡幸し、最終日（16日）に下町（田中町・舞戸方面）を巡幸して白八幡宮へ戻る順路であった。田中町水屋が御旅所になる年は、この順路が逆になり、初日に下町を巡幸する。なお中日（15日）は神輿の行列はなく山車の自由運行のみである。

16日／神輿渡御に従うため、御旅所前の通りに集まってきた各町内の山車。

16日／海上渡御。先導船に続いて、御神輿2基を乗せた御座船（写真右側の大型船）が海上をゆく。その後方を、大漁旗をはためかせた漁船が数多く続く。船上では、大漁祈願祭や海上安全祈願祭が行われる。

14日／願行寺門前では必ず御神輿を休止し、住職の丁重なお迎えを受けることが慣例になっている。これは大正時代、当時の住職が御神輿を修繕されたことがご縁となっている。

14日／昔は旧赤石村であった大和田町内では、現在でも町の入口に門飾りを設け、紋付を着た正装で行列をお迎えする。また行列の折り返し場所は時代によって変化しており、最も遠い年は、西端の戸沼自動車工場まで巡幸していた。

16日／白八幡宮の氏子である田中町町内では、紋付を着た正装でお神輿をお迎えする。

16日／田中町・水屋を通る御神輿。一説によれば、水屋の浜には白八幡宮に合祀される前の白鳥大明神（神輿の御神体の一つ）があったとされている。この故事にちなんで、御神輿2基は必ず水屋で休止するしきたりになっている。

各家々の御初穂は、神輿通過後に三宝持ちの御初穂係によって集められる。

（ミニ解説）御神輿の伝統的なお迎えの方法

白八幡宮大祭における御神輿をお迎えするにあたっては、昔ながらの伝統的な方法があります。ここで一般的な方法をご紹介します。毎回、祭りの年にはチラシ等でお知らせしています。

①家の前に敷物を敷き、机の上には、御初穂（お米）、御灯明（ローソク）、御神酒（お酒）をお供えします。
②御神輿が通過するときには、正座し、拝礼してお迎えします。
③御初穂は、御神輿通過後に三宝でお受けします。

14日／発輿祭の後、白八幡宮の参道を下る御神輿。いよいよ神輿渡御行列の始まりである。

16日／舞戸橋（中村川）を渡る御神輿。橋の向う側は、昭和30年の町村合併前までは旧舞戸村だった。合併後、初めて御神輿はこの橋を渡るようになった。

埋め立て前の海岸通りを進む御神輿（昭和30年代）。

大祭今昔

～白八幡宮大祭の歴史～

江戸時代の祭礼

◆祭礼の始まり

白八幡宮の祭礼は、延宝５年（１６７７）から始まったとされている。これを裏付ける記録が弘前藩の藩庁日記（国日記）の中に残されている。祭礼の翌年にあたる延宝６年８月10日の記事には「鯵ヶ沢去年八月十五日より所之者共神祭仕候」とあり、またこの年の「当年願之儀」についても許可したとある。つまりこの記述から、当初祭礼は延宝５年、同６年と行われたことがうかがえる。さらに「戸沼家文書」などでは延宝７年にも行われており、この頃、祭礼は毎年続けられていたとみられる。

なお当初の祭礼の形態については、現在のところ史料が確認されておらず定かではない。ただし渡御に用いられる神輿については貞享２年（１６８５）の寄進札が現存していることから、少なくともこの時期には、神輿渡御祭礼の形が整ったものと考えられる（コラム①参照）。

大黒天の山車人形
二丁目・米町で戦前まで引かれていた。製作年は不明であるが、藩政時代までさかのぼる可能性がある。現在は武沼家が所蔵している。

◆祭礼の変遷

また一方、天和２年（１６８２）からは、藩主信政の命により弘前八幡宮の祭礼が始まる。白八幡宮と同じ神輿渡御祭礼で、藩の庇護のもと盛大に行われた。この祭礼は、参勤交代で藩主が江戸から帰国した在国年に行われており、原則として２年に一度行われたという（田澤 正『弘前八幡宮祭礼詳解』北方新社、２００８年）。これに対し、鯵ヶ沢の祭礼も１年おき（隔年）で、弘前とは交互に行われたとも言われている。この点はどうだろうか。

弘前八幡宮祭礼が始まった年、天和２年における藩庁日記の記事を見てみよう。天和２年８月11日、それまで８月15日に行われていた鯵ヶ沢八幡宮の祭礼を、弘前のそれと勘案し、18日に変更したいという申し出があったが、藩主信政は特に支障がなければ15日に行うよう申し付けたとある。この記述に従えば、天和２年は鯵ヶ沢でも祭礼が行われた可能性があり、必ずしも弘前と交互になっていない。

またその後、弘前八幡宮祭礼は、元禄年間からは藩主の参勤交代も一定せず、したがって隔年毎に祭礼を行うという原則も変化するようになったとされる（田澤前掲書）。白八幡宮祭礼については「戸沼家文書」によると、元禄10年（１６９７）には「白八幡宮祭礼　従先年一年送り八月十五日当日祭礼仕り」とあり、この年は１年あけて行われた。おそらく元禄９年に八幡宮を襲った火災による延期とみられる。また祭礼は寛延年間（１７４８～１７５１）には隔年で行われており、安永年間（１７７２～１７８１）には一年おきで当番町が設けられたとある。当番町は、安永６年においては二丁目、安永８年には二丁目であった（「戸沼家文書」）。ちなみにこの時期、弘前八幡宮祭礼は同５年、７年、９年と行われているので、確かに白八幡宮と交互にはなっている。いずれにせよ、白八幡宮祭礼が何時から、どのような理由で隔年に行われるようになったのか、現段階では不明な点が多い。今後さらに関係史料を調査する必要があるだろう。

◆山　車

各町の山車については、天保年間（１８３０～１８４４）頃から飾り山であったとされる。人形は、二丁目「漢の沛公」、二丁目米町「大黒天」、七ツ石町「源為朝」、田中町「神功皇后」、釣町「恵比須」があり、それぞれ明治時代まで伝わった。このうち神功皇后の人形は、天保９年（１８３８）に京都から購入したもので、もともとは京都祇園祭の山車用に製作されたものであった。少し小型であったのを譲られたとされている。この人形は明治25年の田中町の火災で焼失したため、現在は伝わっていない。

なお大黒天と恵比須の人形については、今も当時のものが現存している。特に釣町の恵比須人形には弘化３年（１８４６）の箱書きが付されており、年代が推定できるものとしては最古の人形であるとみられる。

近代における大祭

◆明治・大正期の祭礼

祭礼は、明治時代に入ってしばらく中断したのち、明治23年（１８９０）から復活したと言われてきた。ところが「累年意得帳」（市前金五郎文書）では、明治９年（１８７６）に田中町と淀町で御旅所を交互にすることが取り決められており、この時期はまだ祭礼が続いていたようだ。その後、明治23年に復活するまでの間に、一時的な中断があったということであろう。

明治中期になると、東奥日報（明治21年創刊）の新聞記事からも多くの情報が得られる。祭礼が復活した年、明治23年は９月27日・28日の両日にわたって行われた。９月28日は旧暦の８月15日にあたる。つまり明治になって新暦を用いるようになっても、従来どおり旧暦の８月15日にあわせた祭礼日にしていた。なおこの年の飾り山は、次のとおりと報じられている。

二丁目「漢沛公斬白蛇」・二丁目「大黒天」・七ツ石町「源為朝」・田中町「神功皇后」・新町「新田四郎富士越」・釣町「恵比須」・富根町「二十四孝筍堀」・浜町「八幡神馬」。

このほか２台の曳き山車があり、上組「黄石公に張良」・下組「和唐内虎狩」であった。新町では「下司禰宜踊」が催されたとある。さらに中村・鳴沢村からは獅子踊も参加し、にぎやかに繰りひろげられたという（明治23年10月４日・東奥日報）。

また、現存する明治23年「白八幡宮御祭礼行列帳」（弘前市立弘前図書館蔵）をみると、この時期の神輿行列には山屋台（曳き山車のことか）のほか、町印や船印も加わっている。船印（船旗）は近年の大祭でも見られるが、町印については現存していない。当時の町印は、田中町は金の御幣、七ツ石町は馬簾、釣町は浦島太郎など、各町内独特のものであったとされる。

これ以降、祭礼は隔年ごとに続けられたが、おおむね旧暦８月15日にそった日程で行っていたため、新暦での月日は固定していなかった（９月～10月上旬頃）。しかも祭礼日は、他にもさまざまな事情によって変更され

ることがあったようだ。

明治39年（１９０６）、この年の祭礼は、本来であれば10月１日・２日（旧暦８月14日・15日）の日程であった。それを、日露戦争（１９０５年終戦）後で初となる招魂祭にあわせて、日程を繰り延べて10月６日・７日に行っている。招魂祭（８日）は西津軽全郡をあげて行われたもので、東奥日報によると、祭りの呼び込みは近郷近在にも宣伝されて大いに賑わったとある。なお各町の飾り山については、次のように報じられている。

一丁目「漢沛公斬白蛇」・二丁目「大黒天」・七ツ石町「源為朝」・釣町「恵比須」・富根町「狐の嫁入行列」・浜町「えびす大黒」・漁師町「養老の瀧」・淀町「白狐の出現」。

また曳き山車は２台で、上町「神武天皇」、下町「神功皇后」を田中町で曳いていたようである。また新町では例年どおりカシ襴宜が催されている（明治39年10月８日・東奥日報）。

大正時代における祭礼は、大正４年、同８年と行われており、現在と同じような４年に一度の祭りとなっている。なお、その次が大正12年でなく翌13年であるのは、この間、願行寺住職により神輿が修繕されていたからであろう（コラム②参照）。また大正13年においては各町の曳き山車は９台となっており、この頃には、ほとんどの町内が曳き山車に変わっていたようだ。

ちなみに東奥日報にみえる白八幡宮祭礼の表記は、明治期においては「祭礼」「祭典」「例祭」など一定ではない。「大祭」の表記は明治期の記事にもみえるが、おおむね大正期以降に定着していったようである。

大正8年とされる大祭風景。田中町の山車とみられるが人形の題材は不明。先頭の幟は田中町の町印か。

一丁目の山車小屋前（旧鳴海銀行付近）にて。山車の人形は弁慶と牛若丸。小屋の横には盆栽を陳列している。大正13年の大祭と推定される。

大正8年とされる漁師町の山車。人形は「騎馬の加藤清正」とみられる。なおチャンチャレンコの踊り手として、大人の男性1人が写っている。

◆鰺ヶ沢築港工事と白八幡宮大祭

昭和期に入っても、大祭は４年に一度で続けられた。昭和３年（１９２８）は、白八幡宮が創建されたという大同２年（８０７）から１１２０年目にあたる。大祭は９月26日から３日間にわたって行われ、記念の写真帖も発刊されている。写真帖には各町内の古い山車の写真がまとめられており、当時の大祭の様子を伝える数少ない記録集として貴重である（本書「なつかしの山車」参照）。

そして迎えた昭和７年（１９３２）。この年は１月に大火事（鰺ヶ沢大火・２４６戸焼失）にみまわれ、その復興の中で、町の長年の懸案であった鰺ヶ沢漁港の修築工事がようやく実現することが決まった。まさに鰺ヶ沢町の激動の年であった。しかも偶然とはいえ、この年は４年に一度の白八幡宮大祭の年であった。

鰺ヶ沢漁港修築工事の起工式が行われたのは昭和７年９月14日。白八幡宮大祭は９月13日～15日までの３日間。さらに９月16日には西津軽郡の招魂祭、在郷軍人総会、武術大会と続く。町をあげての記念行事の連続であった。東奥日報の新聞紙上でも特集面が組まれ、連日、鰺ヶ沢の賑わいを伝える記事が紙面を飾っている。また記事によると、各町総代の集会において、大祭に関する次のような申し合わせがなされたという（昭和７年９月６日・東奥日報）。

一、御神輿に御供する各町山車の運行に付いては渡御の際は絶対に席列を乱さざる様、祝儀の強請等は絶対になさざる事

二、御神輿渡御の際は拝観者は最も厳粛に敬神の意を披瀝し二階又は高所より拝観等不敬の行為の絶対なき様毎戸に注意する事

三、御神輿渡御の御通路筋は盛砂をなし清洒なる装飾を施す事

二階からの拝観禁止、通り道の盛砂など、近年では見られなくなった古くからの大祭の風習が列記されている点が興味深い。なお同様の注意事項は、鰺ヶ沢町長より各町総代あてに出された通知（昭和７年９月７日付け庶発第１２４号）からも確認できる（「新町町内会文書」）。通知によれば、この年の祭典は各方面より式典参列者や見物人が多数訪れる

近代以降における大祭の変遷（明治23年～）

年号（西暦）	日程	御旅所	山車	特記事項
明治23（1890）	9月27日～28日（2日間）	浜　町	曳き2・飾り8	白八幡宮祭礼の再開（明治10年代に一時中断）
明治25※（1892）	10月3日～5日（3日間）	淀町・田中町		淀町と田中町で御旅所争い
明治27（1894）	9月14日（期間不明）			
明治29（1896）	9月21日（期間不明）			
明治31※（1898）		田中町		
明治35（1902）	9月16日（2日間）			鯡漁不景気により期間・規模縮小
明治39（1906）	10月6日～8日（3日間）	田中町	曳き2・飾り8	日露戦争西郡招魂祭・祭場（大和田）への巡幸あり
明治41（1908）	10月1日～3日（3日間）	淀　町	曳き2・飾り不明	皇太子来県（9月）のため延期
明治43（1910）	9月16日～18日（3日間）	田中町	曳き3・飾り4	
大正4※（1915）				
大正8（1919）	9月14日～16日（3日間）			
大正13（1924）	9月11日～13日（3日間）	淀　町	曳き9・飾り不明	大和田への巡幸あり
昭和3（1928）	9月26日～28日（3日間）	田中町	曳き9・飾り1	1120年記念大祭
昭和7（1932）	9月13日～15日（3日間）	淀　町	曳き10	鰺ヶ沢漁港修築工事起工式
昭和11（1936）	8月13日～15日（3日間）	田中町		大和田への巡幸あり
昭和15（1940）	9月21日～23日（3日間）	漁　港	曳き9・飾り1	鰺ヶ沢漁港修築工事竣工式
（太平洋戦争により自粛）				
昭和24（1949）	8月13日～15日（3日間）	田中町		町制施行60周年記念式
昭和28（1953）	8月14日～16日（3日間）	淀　町		大祭映画撮影
昭和32（1957）	8月14日～16日（3日間）	田中町	曳き9	新町発足記念大祭・舞戸への巡幸始まる
昭和36（1961）	8月14日～17日（4日間）	淀町・漁港	曳き10	海上渡御始まる
昭和40（1965）	8月13日～16日（4日間）	田中町・漁港	〃	町合併10周年記念式典
昭和44（1969）	8月14日～17日（4日間）	淀町・漁港	〃	
昭和48（1973）	〃	田中町・漁港	〃	
昭和52（1977）	〃	淀町・漁港	〃	
昭和56（1981）	〃	田中町・漁港	〃	町文化財指定・大祭映画撮影
昭和60（1985）	8月14日～16日（3日間）	漁　港	〃	町合併30周年記念式典
平成元（1989）	〃	田中町	曳き9・飾り1	
平成5（1993）	〃	漁　港	〃	
平成9（1997）	〃	田中町	〃	
平成13（2001）	〃	漁　港	〃	
平成17（2005）	〃	田中町	曳き7・飾り3	
平成21（2009）	〃	漁　港	曳き7・飾り2	

※大祭日程は、発輿祭から還幸祭までの期間とし、前後の協賛行事等は加えていない。
※本表は「東奥日報」及び「陸奥新報」に掲載された新聞記事をもとに作成した。ただし、大祭の全てが記事に書かれているわけではないので、完全なものではない。特に明治期においては、隔年ごととされる大祭の全てを確認することが出来なかった。この他、明治25年・31年については「累年意得帳」、大正4年は「新町町内文書」の内容から、祭礼があったことを確認できたため表に加えた。
※御旅所・山車数については、記事から読み取れる内容のみ記載し、それぞれ場所・数が明記されていない年は空欄とした。
※近年の内容については、「広報あじがさわ」（昭和31創刊）及び関係者からの聞き取り調査をもとに補足している。
※お気づきの点や新資料等があればぜひ情報提供いただきたい。これからも大祭の歴史を語り継ぐために。

新町町内会で所蔵している大祭関係の帳簿類。主に明治期以降のもの。
「飾山」と表記しているのは塩釜御仮殿に関する帳簿とみられる。

年、同15年と続く。昭和15年（1940）3月には、先の鰺ヶ沢漁港修築工事が竣工する。かくしてこの年の大祭は、またも漁港修築工事の式典（竣工式）とあわせて行われたのだった。

昭和15年8月22日、漁港の新埋め立て地にて竣工式を挙行。白八幡宮大祭は8月21日～23日までの3日間。また西津軽郡連合招魂祭も行われた。なお、この年は竣工式会場となった漁港埋め立て地に御仮殿（御旅所）を設けたようである（昭和15年8月22日・東奥日報）。

白八幡宮大祭の現在

戦前の大祭は昭和15年まで行われたが、その後は戦争のために自粛。戦後は昭和24年（1949）から再開された。この年は、まず8月12日に鰺ヶ沢町町制施行60周年記念式、大祭は8月13日～15日の日程で行われた。なお祭礼日については、戦前から戦後にかけて変化しており、昭和7年大祭までは従来どおり旧暦8月15日にあわせていたが、昭和11年大祭では新暦8月15日、同15年大祭では8月下旬の日程であった。昭和24年大祭からは再び新暦8月15日前後に行われるようになり、4年に一度づつ、途切れることなく現在に至っている。

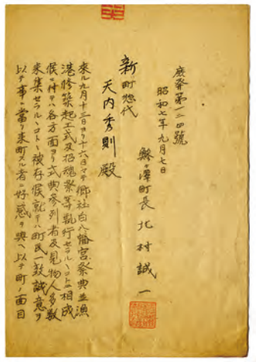
戦後期の大祭は、古くからの伝統の部分を残しつつ、様々な催し物を加えてより盛大に行われるようになった。昭和28年に撮影された白八幡宮大祭映画には、花火大会や相撲大会、駅伝競走に船競争など、数々の協賛行事でにぎわう町の様子が映し出されている（コラム③参照）。

昭和30年（1955）には、鰺ヶ沢町・舞戸村・中村・赤石村・鳴沢村の合併により、新鰺ヶ沢町が誕生。昭和32年大祭は「新町発足記念大祭」として開催された。

またこの年から、神輿渡御は舞戸橋（中村川）を渡り旧舞戸村側にも巡幸することになった。さらに行列には、新たに加わった農村地域（旧4ヶ村）のために、40流もの五穀豊穣の旗列が連ねられたという。その一方で、昭和36年からは海の神輿行列とも言うべき海上渡御も始められた。

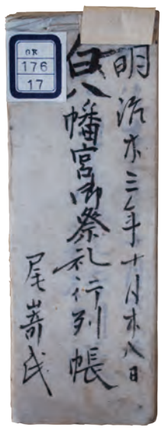
こうして大祭は、少しずつ旧町村同士の融和を図りながら、しだいに新鰺ヶ沢町全体の祭りになっていったのである。ちなみに昭和56年、鰺ヶ沢町指定文化財として指定された第一号は「白八幡宮神幸祭」であった。

なお津軽地方で、現在も存続している山車祭礼（神輿御渡行列を伴う）は、白八幡宮大祭のみであるとされている（青森県立郷土館『青森県山車祭礼調査報告書』2003年）。ただし、これまで見てきたように、その実態にはさまざまな世相が反映され、影響を受けながら変化してきたことがうかがえる。白八幡宮大祭の歴史を読み解く作業は、まだ始まったばかりなのである。



白八幡宮祭典等に関する通知（昭和7年・新町町内会蔵）。当時の鰺ヶ沢町長北村誠一より各町総代にあてて出されたもの。祭典における注意をこと細かに通知している。

御楯を捧持する子供たち（昭和30年代）。



明治23年「白八幡宮御祭礼行列帳」
（弘前市立弘前図書館蔵）

〈参考資料〉
●「弘前藩庁日記」（弘前市立弘前図書館蔵）　●「津軽編覧日記」（同図書館蔵）　●「封内事実秘苑」（同図書館蔵）
●「新町町内会文書」（新町町内会蔵）　●「戸沼家文書」（『鰺ヶ沢町史』第三巻所収）
●「累年意得帳」市前金五郎文書（『鰺ヶ沢町史』史料編所収）　●「東奥日報」（明治21年創刊）
●「陸奥新報」（昭和21年創刊）　●『白八幡宮写真帖』1120年大祭記念、昭和3年
●『青森県山車祭礼調査報告書』青森県立郷土館、2003年　●田澤 正『弘前八幡宮祭礼詳解』北方新社、2008年
〈付記〉関係史料の解読については桜井冬樹氏よりご指導いただいた。

コラム②

◆御神輿が結んだご縁 ～大祭と願行寺～ ◆

新町に所在する願行寺（真宗大谷派）は、承応元年（1652）、釈良善により開基されたという古刹である。現在、白八幡宮大祭の御神輿は、巡幸に際して必ず願行寺門前に休止し、住職の丁重なお迎えを受けることが慣例となっている。それは、次のような出来事がご縁となって始まったとされている。

大祭で用いられる御神輿は、貞享2年（1685）に寄進された後、寛政年間（1789～1801）にも修繕が行われたが、大正期頃には使用に耐えられないほど老朽化していたという。これを気にかけた宮総代の方々は、その修理を、趣味に秀でた人であったとされる願行寺14代住職・古舘芳道にお願いした。芳道は当時75歳の高齢で引退中であったが、こころよく引き受け、大正12年（1923）から御神輿を引き取り、約1年半かけて現在のように修復したという（寺には、当時使用した手作りの金具等が数点保存されている）。以上の経緯については、願行寺で代々伝えられてきたほか、近年になって、御神輿の台座に裏書きが残っていることからも確認された。

現在の18代住職・古舘彰一も、14代と同様趣味多く、御神輿の金具類の修理を引き受けられているという。御神輿が結んだご縁は、今なおその子孫によって受けつがれているのである。

願行寺では、燭台・香炉・花をお供えし、仏式で御神輿をお迎えする。

御旅所

御旅所（御仮殿）とは、神社を出た神輿が巡幸の途中で一晩をすごす場所のことをいう。大祭の１日目、御旅所に入った２基の神輿は、畳敷きの奥に安置され着輿祭が執り行われる。また夜には宵宮が行われ、神職による神楽（津軽神楽）が奉納される。それに合わせて氏子や近所の人たちが大勢参拝に来る。２日目は神輿渡御はなく、３日目は発輿祭が行われて神輿は再び巡幸の途につく。

近年の大祭における御旅所は、田中町水屋と鰺ヶ沢漁港とで交互に設けられている。開催年ごとに、１日目の順路が上町（大和田方面）である年は漁港、下町（田中町・舞戸方面）である年は田中町が御旅所となる。

なお御旅所の場所については各時代で変化がみられ、古くは浜町の弁天宮（胸肩神社）であったとされる。その後、文化３年（１８０６）からは新しく成立した富根町におかれ、安政年間（１８５４～１８６０）には次に成立した淀町に移ったという。また明治７年（１８７４）に淀町稲荷宮（豊受美神社）の社殿が新築されると、ここが御旅所を兼ねるようになった（「累年意得帳」）。町場の拡大に合わせて、御旅所の場所も、しだいに町の西側へと移されたようである。

また「累年意得帳」（市前金五郎文書）によると、明治９年に田中町が氏子となってからは、田中町と淀町で交互に御旅所を設けるようになった。ところが明治25年大祭では両町で御旅所争いが起こり、御旅所を両町二ケ所に設けたこともあったという。なお田中町の御旅所は、近年は水屋に仮の祭殿を設けているが、昔は町内のメ二戸沼家が御旅所をつとめた。現在の巡幸においても、戸沼家前で必ず御神輿を休めるのは、このことに由来している。

一方、淀町の御旅所は、昔は豊受美神社の社殿に神輿を安置していたが、その後、参道前に仮の小屋掛けをするようになった。また以前は、御旅所神社前で休止し昼食をとるのが慣例であったという（町内の十川家が休憩所をつとめた）。なお淀町の御旅所は、昭和52年大祭を最後に現在は設けられなくなっている。

漁港の上屋を利用して設けられた御旅所（御仮殿）に入る御神輿（平成21年）。

夜は、神職による神楽が奉納される。

各町内の山車

〈七ツ石町〉

万治2年（1659）から開発が始まり、延宝9年（1681）頃に家並みが形成されるようになった。絵図では「七ツ石二丁目」と記されることもある（同二丁目は後に田中町となった）。町名の由来は、すぐ沖に七つの瀬（海中の岩場・浅瀬）があったためと言われている。

〈二丁目・米町〉

「本町二丁目」は町奉行所の東側にあたり、古くは「下町」と称された。「上町」（本町一丁目）とともに、鰺ヶ沢では最も古くから開けた町であったとされる。二方、裏通りにあたる「米町」は、寛文11年（1671）、藩の米を売買するための町として命名されたという。二丁目と米町という二つの由緒ある地名を合わせて、二つの町内会を形成している。

〈一丁目〉

古くは「上町」と称された。「下町」（本町二丁目）とともに、鰺ヶ沢では最も古くから開けた町であったとされる。藩政時代には町奉行所（御仮屋）、御番所、高札場があり、多くの船問屋が軒を連ねる政治・経済の中心地であった。なお白八幡宮は一丁目にあり、町内は代々氏子として大祭の中心的役割を担ってきた。

〈浜町〉

古くは海士町（漁師町）の一部であった。網干場にそって町並みが広がったとされ、貞享4年（1687）の検地帳から「浜町」の名が見られる。藩政時代には、藩の年貢米を収納した御蔵や、弁天崎には御番所などがおかれた。また白八幡宮祭礼の御旅所も、もとは浜町弁天宮（胸肩神社）に設けられていたとされる。

〈釣町〉

古くは海士町（漁師町）の一部。寛永14年（1637）頃に釣師町」とともに「塩町」と命名されたという。なお町内の塩釜神社は、以前は白八幡宮に合祀されており、新町も氏子であった。

〈漁師町〉

鰺ヶ沢で古くから開けていたとされる町の一つ。寛永年間（1624～1644）頃は「海士町」と称され、漁業と深くかかわりをもって発展した町である。区域も、現在の釣町・浜町・新地町まで含めた広い町内であった。なお町の西端には木戸が置かれた時期もあり、富根町ができる前までは、ここが鰺ヶ沢の町はずれであった。

なお漁師町町内では、大祭で渡御する神輿の一つ（葱華輦）を、代々、漁師が担ぐしきたりになっている。

〈新地町〉

古くは海士町（漁師町）の一部であったとされる。「後町」や「青楼」とも言われ、藩政時代に遊女町（遊廓）として開かれた。絵図等によると、町は土塁で囲まれて木戸が設けられるなど、吉原遊廓のような構えになっていた。

〈富根町〉

文化2年（1805）頃に形成された町で、古くは「舟町」とも書いた。この浜に津軽藩のお早船（軍船）が置かれていたため、名付けられたとされている。延寿院が「お早の寺コ」と呼ばれるのも、その名に由来している。

〈淀町〉

藩政時代末期の安政年間（1854～1860）になって、富根町（舟町）の木戸の外に10数軒の家屋敷がつくられたのが、町のおこりとされる。旧町内では最も新しくできた町である。かつては茶屋や馬宿が立ち並び、町の西の出入り口として、街道を行き交う人で賑わった。

また町の西端には豊受美神社が鎮座し、明治7年に社殿が再建されてからは、白八幡宮大祭における神輿の御旅所として定められた。

〈田中町〉

藩政時代の絵図には、「田町」または「七ツ石二丁目」などと記されている。正式に「田中町」となったのは宝永年間（1704～1711）からとされる。町名の由来は、田の中にできた町という説もあるが、はっきりしない。また、神輿渡御の御旅所が置かれる「三ツ屋」（水屋）は、もともと独立した村で、後に田中町の一部になったとされている。この他、田中町町内は白八幡宮の氏子として、古くから漁師が御神輿（鳳輦）を担ぐしきたりとなっている。

田中町 神功皇后

●人形

神功皇后（第14代仲哀天皇の后）は、亡くなった天皇に代わって、海を渡り朝鮮半島の新羅の国に攻め入った。この時、皇后は身ごもっていたが、お腹に石を当てておさえ、出産を遅らせたという。やがて帰国後に、九州で応神天皇をお生みになった。鎧をまとい弓矢を持った神功皇后のかたわらで、この遠征を補佐した武内宿禰が応神天皇を抱きかかえ見守っている。

●沿革等

田中町の「神功皇后」人形の歴史は古く、天保9年（1838）に京都祇園祭の山車用に製作されたものを購入したのが始まりとされる。この人形は、明治23年大祭までは飾り山として伝わっていたが、明治25年の田中町火災で焼失。その後、同じ「神功皇后」を題材とする人形が作られたが、飾り山ではなく曳き山車に変わっている。また、この2代目の人形も戦後の火災で焼失しており、現在の「神功皇后」は3代目の人形である（昭和48年大祭から）。なお、戦後火災で焼失した後、しばらく人形が無かった田中町では、「安倍貞任・宗任」「太閤記」など様々な人形をその年ごとに借りてきて曳いていた。

七ツ石町 川中島の決戦

●人形

戦国時代、甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信との間で繰り広げられた川中島の戦い。北信濃の支配権をかけて数度にわたって争われた。なかでも最大の激戦は、永禄4年（1561）に行われた第4次川中島合戦だった。乱戦のさなか、両雄同士の一騎打ちがあったとされる。馬上の謙信は武田本陣まで攻め入り信玄に切りつけるが、信玄は軍配でこれをかわした。大迫力の決戦の様子を再現している。

●沿革等

七ツ石町で、藩政時代から伝わった人形は「源為朝」であったとされる。明治時代の大祭関係の新聞記事をみると、飾り山として飾られていたらしい。その後、何度か人形の題材もかわり、曳き山車となった。戦後は「新田四郎」人形を曳いている。猪を取り押さえる富士の巻き狩りの場面を再現したものだったという。なお、現在の「川中島の決戦」は昭和32年大祭の時に新調された。企画・色彩・衣装は弘前ねぷた絵の名人として知られる竹森節堂。人形は弘前の仏師・森祥雲、馬は大川宗達が製作した。また人形にちなんで、歌謡曲にあわせた「川中島」の踊りが披露されたという。

二丁目・米町
加藤清正公（かとうきよまさこう）

●人形

豊臣秀吉の武将であった加藤清正公は、智勇兼備の名将として知られる。秀吉の朝鮮出兵では、文禄の役（1592～1593）、慶長の役（1597～1598）の2度にわたり主力として戦い続け、勇名をはせた。慶長3年（1598）、秀吉の死去を受けて朝鮮より撤退。人形は、清正公が朝鮮から帰国したとき、船上から故国をながめ懐かしむ場面を表現している。

●沿革等

二丁目・米町の人形は、近世・近代を通じて「大黒天」を受けついできた。また、ずっと飾り山であったが、大正頃から曳き山車に変わったとみられる。現在の「加藤清正」は、戦前頃に新調されたもので、五所川原の人形師・森英之進の作である。なお「大黒天」人形も、その後、戦後しばらくは山車小屋で飾り山として置いて見せていた（人形は現存している）。またこの町内の山車には、チャンチャレンコと夜神楽に加えて、大人2人による「弁慶と牛若丸」の舞がつく（囃子は夜神楽に同じ）。戦後から始まり、一時途絶したが、平成13年から町内の有志により復活した。

二丁目
楠公桜井ノ駅（なんこうさくらい）

●人形

南北朝時代、九州で勢力をたくわえ怒涛の如く京都に侵攻してきた足利尊氏の大軍を、朝廷に仕える楠木正成が僅かな軍勢で迎えうつ。死を覚悟した正成は、湊川の決戦におもむく途中、桜井の駅（現在の大阪府島本町）で子の正行に帰国を命じ、今生の別れを告げた。有名な「太平記」の名場面の一つ。

●沿革等

二丁目の人形は、もともと「漢沛公斬白蛇」（漢の劉邦）の人形が藩政時代から伝わっていたとされる。飾り山であったが、日清戦争が始まった明治27年大祭では中国趣味を嫌い、「須佐男尊大蛇退治」に変えられたという。また新聞記事からは、その後「漢沛公」に戻したり、「今川義元」「曾我兄弟」など、頻繁に人形を変えていたことがうかがえる。なお飾り山は、大正期頃から曳き山車になったとみられ、大正13年と推定される二丁目山車の写真では「弁慶と牛若丸」人形を曳いている。昭和3年大祭からは現在の「楠公桜井ノ駅」を受けついできている。また二丁目の山車には、独自の芸能として「児雷也（じらいや）」を題材とした男一人の舞がついている。夜神楽の囃子にあわせた舞で、戦後に町内の人が始めたという。

浜町
素戔嗚尊（すさのおのみこと）

●人形

素戔嗚尊は、天照大神（あまてらすおおみかみ）の弟として登場する日本神話の神である。出雲の国に降り、その地で奇稲田姫（くしなだひめ）を喰いにきた八岐大蛇（やまたのおろち）（8つの頭と8つの尾をもつ大蛇）を酒に酔わせて退治した。人形は、奇稲田姫を守りながら十拳剣（とつかのつるぎ）という剣を振りかざし、大蛇にいどむ素戔嗚尊の勇ましい姿を表現している。なおこの後、姫を妻に迎えた素戔嗚尊は、出雲の須賀宮に居を構え、水田が豊かに実る里をつくったという。

●沿革等

明治23年に大祭が復活したとき、浜町では「八幡宮の神馬」を飾り山としたが、にわか作りのものであったという。その後、明治期にはしばらく「恵比寿と大黒」が続いた。昭和3年大祭では「七福神」人形を曳いている。現在の「素戔嗚尊」が登場するのは、次の昭和7年大祭からである。この人形は戦前・戦後と受けつがれ、今日に至っている。なお人形の八岐大蛇は、もとは白蛇であったが、その後、緑色の蛇に変わった。また浜町の山車では、チャンチャレンコと夜神楽の他に、戦後、歌舞伎「白浪五人男」が踊られたりもしていた（囃子は夜神楽に同じ）。

昭和48年大祭

釣町
恵比須（事代主命）（えびす ことしろぬしのみこと）

●人形

狩衣（かりぎぬ）をまとい、右手に釣竿を持ち、左に鯛を抱え込んだ恵比須様の姿は、事代主命（日本神話の神）の姿でもあるとされる。恵比須は、古来より漁業の神であり、また商売繁盛の神としても知られる。大漁祈願や海の安全を願う漁師たちの信仰を集めた神様であった。福々しいその笑顔は、まさに「えびす顔」である。

●沿革等

釣町の「恵比須」は、人形の箱に弘化3年（1846）の箱書きがあり、年代が推定できるものとしては町内最古の人形とみられる。飾り山である時期が長かったが、昭和7年大祭で初めて曳き山車にしたという。ただしその後、昭和15年には再び飾り山に戻された。また戦後は、曳き山車として続けられたが、人手不足のため平成元年から飾り山となって現在に至っている。また釣町では、恵比須は神様であることから、毎年正月には人形の頭部を箱から出して、お神酒・お供えをして祀るという行事が近年まで続けられていた。この他、釣町では、大祭の年に恵比須様の前で舞う「恵比須舞」があったが、昭和15年大祭を最後に途絶えている。

漁師町 八幡太郎義家（はちまんたろうよしいえ）

●人形

平安時代後期の武将・源義家は、京都の岩清水八幡宮で元服したことから八幡太郎と称した。永保3年（1083）に陸奥守に任ぜられたが、清原氏（出羽国の豪族）の内紛から、後三年の役が始まった。義家は金沢柵（現在の秋田県横手市）に出陣。その行軍の途中、義家が馬を止めて空を見上げると、ふだんは整然と列をなして飛ぶはずの雁が乱れて飛んでいた。それを見た義家は敵兵が潜んでいることを察知し、これを討って合戦に勝利したという。

●沿革等

明治期には「加藤清正（騎馬）」や「養老の滝」を飾り山にしていた。また漁師町では早くから曳き山車にしており、すでに明治43年の大祭で「牛若丸」山車を曳いている（当時、曳き山車は3町内のみ）。戦前から戦後にかけては「大極殿ノ天誅」を曳いていた。大化の改新で、中大兄皇子が蘇我入鹿を討ち取る場面を人形にしたものだった。人形が現在の「八幡太郎義家」に変わるのは昭和30年代から。製作は五所川原の人形師によるという。また漁師町では、戦後、独自の見世物として「ベコ踊り」が始まり、大祭でも好評を博している。

新地町 羅生門（らしょうもん）

平成13年大祭

●人形

平安時代、京の都の羅生門に住みついた鬼（茨木童子）と、渡辺綱との戦い。渡辺綱は、大江山の鬼退治で知られる源頼光の四天王の一人。また茨木童子は、大江山で退治された鬼の頭領・酒呑童子の家来であった。人形は、羅生門で片腕を切り落とされた茨木童子が、渡辺綱の叔母に化け、その腕を奪い返しにきた場面を再現している。

●沿革等

新地町で曳き山車を運行するようになるのは、昭和30年代からである。それ以前は、漁師町の山車を一緒に曳いたこともあった。また漁師町が現在の「八幡太郎義家」人形を新調した際には、以前の「大極殿ノ天誅」を譲り受けて曳いたこともあったという。その後、まもなく「羅生門」人形を曳くようになった。この人形は、昔、町外から譲られたものとも言われている。新地町の山車運行は平成13年大祭まで続けられたが、現在は人手不足等により途絶えている。なお平成17年には飾り山として復活し、大祭のＰＲ用に展示された。

富根町 神武天皇（じんむてんのう）

平成13年大祭

●人形

神倭伊波礼琵古命（かむやまといわれひこのみこと）（後の神武天皇）は、長兄の彦五瀬命（ひこいつせのみこと）、次兄の稲飯命（いなひのみこと）と共に、はるばる日向（九州）から大和へと進軍した。八咫烏（やたがらす）の導きで熊野から入り大和を平定。橿原の宮で即位し、日本の初代天皇となった。人形は、宿敵・長髄彦（ながすねひこ）との戦いで天候が急変したところ、金の鵄（とび）があらわれ天皇の弓にとまり、金色の目くらみで敵軍を討ち破ったという故事にもとづいている。神武東征神話の有名な場面である。

●沿革等

明治23年に大祭が復活したとき、富根町では、にわか作りの「二十四孝筍掘」を飾り山にしたとされている。その後、明治時代には「狐の嫁入行列」（飾り山）に変わり、昭和3年大祭では「羅生門」の山車が曳かれていた。現在の「神武天皇」は、もともと上組消防で曳いていた山車人形で、代々、漁師町で保管していたという。戦後からは、ほぼ富根町の山車として曳かれ続けたが、時には、「浦島太郎」のような生き人形を曳くこともあったようである。富根町の山車運行は平成13年まで続いたが、人手不足等により、その後は飾り山となって今日に至っている。

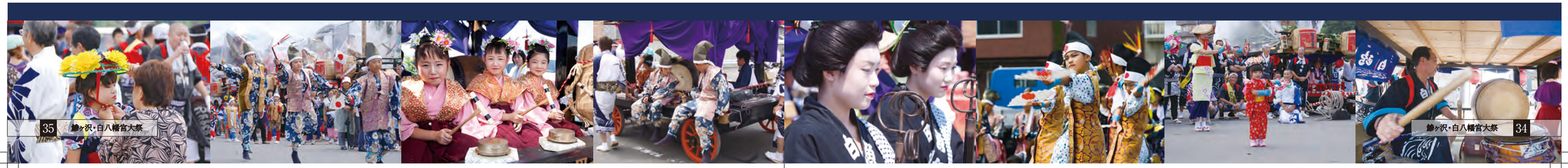
淀町 日本武尊（やまとたけるのみこと）

●人形

第12代景行（けいこう）天皇の皇子である小碓命（おうすのみこと）は、父の命により、九州の熊襲健（くまそたける）の討伐に向かった。わずかな従者しか与えられなかった小碓命は、女装して忍び込み、武勇に秀でた熊襲健を見事討ち取ったという。また、討たれた熊襲健は死にのぞみ、小碓命の武勇を賞してタケルの名を献上したとされている。こうして小碓命は日本武尊を名乗り、日本神話の英雄として活躍し続けたのであった。人形は、小碓命が今まさに熊襲健に刃を突き立てようとする。手に汗にぎる場面を再現している。

●沿革等

淀町は、大祭が復活した明治23年では、飾り山を設けていないようである。新聞記事からは、その後「加藤清正」（明治27年）、「白狐の出現」（明治39年）を飾り山にしたことが確認できる。現在の「日本武尊」は、戦前・戦後を通じて同じ人形で続けてきている。現在の町内の山車人形の中では、一丁目の「楠公桜井ノ駅」よりも古いと言われ、おそらく大正期頃までさかのぼるとみられる。今も現役で曳かれている数少ない古い人形である。



カシ祢宜（昭和30年代頃）

塩釜神社御神楽

新町（あらまち）のカシ祢宜（ね ぎ）

藩政時代、新町には塩の荷揚げ場などがあり、塩販売の町であったとされている。このため新町では、塩の守護神である塩釜（しおがま）明神を勧請（かんじょう）したという。寛文10年頃（1670）には祀られていたとされるが、新町のどこに創建されたかは不明である。塩釜神社はその後、浜町の胸肩（むなかた）神社に合祀され、さらに明治4年（1871）の神社改正に際して白八幡宮に合祀された。なお現在の新町の塩釜神社は、昭和56年に新しく建立され、白八幡宮から遷座（せんざ）したものである。

新町では、明治23年（1890）に大祭が復活したとき「新田四郎」を飾り山にしたともされるが（明治23年10月4日・東奥日報）、それ以外は山車を作らず、毎回「カシ祢宜」という神楽を催してきた。その歴史は古く、安永9年（1780）、新町の名主・大塚又右衛門が商用で大坂へ出かけた帰り、奥州仙台の塩釜大明神に参詣の際、大にぎわいのカシ祢宜神楽を見たという。芸事の好きな大塚又右衛門は大いに感じ入り、新町の塩釜大明神とのご縁もあるので、その地に1ヶ月も足を留め、ことごとく習得された。帰郷後は熱心に子供たちに教え、以来、白八幡宮大祭には、新町でカシ祢宜神楽が奉納されるようになったと伝えられる（「大塚家旧記」より）。なお明治時代の新聞記事では、毎回、祭り第一の呼び物であったとも報じられている。

現在、カシ祢宜は、大祭期間中の3日間にわたり演じられる。演者は「太夫（たゆう）」と「祢宜（ねぎ）」、囃子方は太鼓1人、小太鼓4人、鉦2人である。新町の神輿の通る道筋には塩釜神社の御仮殿（おかりでん）が設けられ、その神前で、演者も囃子方も、全て小学生の子供によって行われる。以前は、大人の笛1人が付いていた（現在は途絶えている）。なお御仮殿の場所は、必ずしも毎回同じ場所ではない。時には、住宅を間借りして行ったこともあった。

カシ祢宜の演目の由来は不明であるが、狂言に似ているともされる。カシ祢宜は、元々あった宮城県の塩釜神社には伝わっておらず、現在では鰺ヶ沢にしか残っていないことから、貴重な伝統芸能として注目されている。

太夫

狂言に似た掛け合いの後、太夫（右上）と祢宜（左下）が二人で舞う。太鼓・鉦の囃子方まで子供たちがつとめる。写真は平成21年のもの。

祢宜

塩釜神社の御仮殿。正面は杉の葉で飾られている。

「カシ祢宜」詞章

祢宜「か様に候者は此の宮に仕え奉る神職の者にて候。今日は三宝吉日なればお神楽を奏し奉る。宮の掃除も致さねばなりませず、塩釜の掃除も致さねばなりませず、さても、さても、いそがわしいことかな。盆と正月が一度に参った様でカシ祢宜心持ぞくぞくいたします。先づ先づ氏神え参ろう。」（祢宜社前に参る）

祢宜「臨兵闘者シチヤ、クチヤ、カチヤ、クチヤ、カシ祢宜によい、いたこを授けて下さい。」

「あーら、おそなわって参りました。」（カシ祢宜もとの位置に帰る）

祢宜「太夫殿太夫殿、宮の掃除も出来ました、塩釜の掃除も出来ました、早うお神楽を上げさしてよう御座ろう。」

太夫「何太郎冠者」

祢宜「御前に」

太夫「掃除出来たか」

祢宜「ハハー」

祢宜「太夫殿太夫殿、常のこととは違います、用意はせー」

太夫「そそうを云うな」

祢宜「ハハー」

祢宜「太夫殿太夫殿、いたこのことは、おなかぶねにいたしましょう。」

太夫「下に居らんかー」

祢宜「ハハー」

祢宜「皆々様ようおききなさいませ、私事は護符守も書きますし、祈念祈とうも上手なり、宣託分は、いつもの通りしますに飯一杯の御奉公であんまりたたいて、もらいますまい。」

太夫「下におらんかー」

祢宜「ハハー」

太夫「そもそもこれは塩釜大明神に仕え奉る神職の者にて候。」

祢宜「幸い幸い」

太夫「神は人のうやまいによって威を益し、人は神の恵によって子孫繁生す。」

祢宜「納就納就。」

太夫「ここにも神の五十鈴川天下泰平　御代萬歳、四海の浪も治まりて。」

祢宜「納就納就、幸い幸い、うやまって申す、武運長久、海漁満足、氏子繁昌と御まもり候、えや、さいさい小豆餅たんとついて、あげます。」

太夫「仲々納就。」

祢宜「幸い幸い。」

太夫・祢宜「国も港も賑かに、袖振分の花かつぎ。出入る船は数知れず、世も豊年に治まりて、汐汲む乙女諸共に、いざや神慮謹み申すなり。」

囃方「ハイヤ」（太夫祢宜共に舞う）

※「塩釜神社大祭御神楽カシネギ控」（新町、昭和40年）より転載。

なつかしの山車（やま）

大祭には、古式ゆかしい神輿行列に加えて、各町内の華麗な人形山車が祭りに彩りを添える。近年では、山車を「ダシ」と呼ぶことが多くなったが、鰺ヶ沢では古くから「ヤマ」と呼ぶのが普通であった。山車には各町内自慢の人形が飾られる。昔からの伝統的な人形の題材を受けつぐ町内がある一方で、その時代ごとで様々な趣向を凝らした新しい人形を飾りつける町内もある。山車は、いつの時代も各町内の誇りであった。

なお山車はもともと飾り山といって、各町内に飾っていたものとされる。例えば大祭が復活した明治23年（1890）には、飾り山が8町内であるのに対し、曳き山車は2台であった（上町全体と下町全体で1台ずつ）。その後、しだいに曳いて練り歩くようになり、大正期頃には、ほとんどの町内が曳き山車に変っていった。

曳かれる山車は四輪の台車で、高欄（こうらん）（手すり）をめぐらした台の上には町ごとの人形を飾り、後ろには見送りがつく。下には囃子方が乗り込む。車輪は、近年はゴムタイヤが多くなったが、いまだに昔ながらの金車（かなぐるま）（金具付の木製車輪）で曳いている町内もある。なお山車の運行では、曳き手の先頭で金棒（かなぼう）（錫杖（しゃくじょう））を持った露払いが2人つく。元は男性が露払いであったが、戦後は、日本髪に法被股引（はっぴももひ）き姿（浴衣の所もある）の若い女性がつとめることが多くなった。

右ページに掲載した9点の写真は、いずれも昭和3年（1928）大祭のもの（釣町のみ次項に掲載）。この年は白八幡宮の創建1120年目にあたることから、大祭記念の写真帖が発刊されており、全ての町内の写真がそろっている。また左ページには、戦後期の写真の一部を掲載した。戦後の山車では、富根町など「生き人形」を出す町内もあったことが興味深い。昭和36年には、山車を持っていなかった大和田町内会でも、トラックを山車にみたてた「花電車（はなでんしゃ）」を大祭に出したこともあった。

山車の人形は各町内で時代ごとに変遷しているが、全ては把握されていない（本書「大祭今昔」「各町内の山車」参照）。お気づきの点や資料等がある方は、大祭の歴史を後世に伝えていくためにも、ぜひご教示いただければ幸いである。

七ツ石町「川中島の決戦」。昭和32年、新品の山車と記念写真（旧保健所前にて）。

戦後、火災によって人形が焼失した田中町では、様々な人形を他町から借りてきて曳いていた。写真は「安倍貞任・宗任」（昭和30年代）。

「生き人形」では、仮装した人が人形に扮してポーズをとる。戦後、富根町でも浦島太郎の「生き人形」を出したことがあった。なんと玉手箱からは、白い煙がふき出す仕掛けになっていたという。

大和田町内会の「花電車」。戸沼自動車のトラックが山車になり、荷台の上には浦島太郎を題材にした「生き人形」が乗り込んだ（昭和36年）。

大黒天（二丁目・米町）

弁慶牛若丸（七ツ石町）

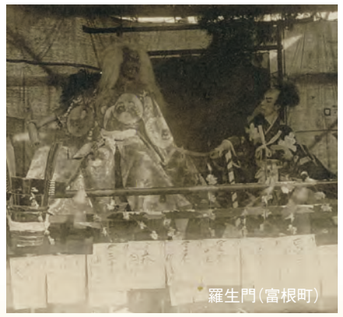
神功皇后（田中町）

大極殿ノ天誅（漁師町）

七福神（浜町）

楠公桜井ノ駅（一丁目）

日本武尊（淀町）


羅生門（富根町）

神武天皇（消防組）

昭和3年の1120年大祭記念『白八幡宮写真帖』より。撮影は二丁目・桜井写真館。

淀町町内によるチャンチャレンコ。
舞戸本町の通りにて（昭和30年代）。

白八幡宮大祭と芸能

◆チャンチャレンコ ◆夜神楽（よかぐら）

大祭では様々な芸能が催される。現在では、各町内の山車で行われるチャンチャレンコと夜神楽がお馴染みであるが、これらの芸能にも変遷があるとされている。山車はチャンチャレンコの囃子で進み、夜神楽が戻りの囃子となる。

踊りは運行の途中で、随時山車を止めて行われる。なお、現在は男の子たちが多数で踊るチャンチャレンコであるが、大正頃の写真を見ると、大人を交えた1～2名程度で踊られていたようだ。また夜神楽については、戦後になってから、女の子たち用に、戻りの囃子に踊りを付けたものとされている。踊りはいずれも、各町内ごとで特徴がある。また夜神楽の囃子にあわせて、一丁目では「児雷也（じらいや）」、二丁目・米町では「弁慶と牛若丸」が舞われるようになった。

この他、戦後の成長期には、歌謡曲を取り入れた様々な芸能も各町内で催していたという。ただしこうした新種の芸能は、伝統行事としての観点から、規制を受けたりしたとされる。

◆恵比須舞（えびすまい）

漁業と商いの神である恵比須（事代主命）は、嘉永5年（1852）、田中町中で勧請し、白八幡宮に合祀したとされている。これは恵比須様が三ツ屋浜（水屋田中町）に上陸し、付近の漁民に漁業の秘伝を授けたという伝説に由来する。このため田中町では恵比須神への崇敬が厚く、八幡宮祭礼では「恵比須舞」が舞われていたという。

また釣町でも、代々「恵比須」人形を飾り山にしており、かつては「恵比須舞」を舞う風習があった。釣町の恵比須舞は、来生寺門前に飾られた恵比須人形（御神体）の前に仮舞台を設けて催された。最後に舞われたのは昭和15年の大祭で、それ以降は途絶えている。

「恵比須」人形と「恵比須舞」（釣町）
恵比須に扮した子供2人で舞を演じた。囃子方も子供がつとめ、大太鼓1人、小太鼓4～5人であったとされる。この他、大人1人の笛が付いていた。写真は昭和3年の『白八幡宮写真帖』より。

「恵比須舞」詞章

東西　東西　そもそも当ゑびす様は　事代主の尊にて　商売繁盛　漁業万足の神なれば
謹んでお祝い申したてまつる
一の岩に足をかけ　二の岩に腰おろし　三の岩に竿さして　ことふきの針に南天の餌かけて
沖をめがけて　さんぶらざんと投げたれば
鯛の引張りようか　すずきの引張りようか
鯛を釣りあげて　小脇にかえこんで　沖を眺めりゃ　沖のかもめ　首こそろいの　だっそろい
ミッサイナ　ミッサイナ　ゑびす舞はミッサイナ　ゑびす舞はミッサイナ

※昭和15年、最後の恵比須舞を実際に演じた上田喜一の記憶による筆記。なお恵比須舞については、『白八幡宮写真帖』（昭和3年）のほか、『鯵ヶ沢町史』にも詞章の記載があるが、細部で少しづつ違いがみられる。

◆奴（やっこ）の祝い言葉

大祭の神輿行列には、「花警固（はなけいご）」として稚児殿様や稚児奴姿のかわいらしい子供たちが参加していた。かつては警固衆に従う大人の奴（赤奴・伊達奴ともいう）がおり、顔に隈（くま）をとり、挟箱（はさんばこ）をふりふりオオヤゲ（素封家）の家の前で祝いの口上を述べながら、上手に踊ったという。戦後しばらくして途絶えてしまい、現在は伝わっていない。

なお昭和28年大祭の記録映画では、奴言葉の肉声の一部が録音されており、唯一残された音声資料として貴重である。

昭和28年撮影の記録映画に映された奴の姿。
独特の奴歩きをしながら行列に加わっている。

奴の祝い言葉

ふり出せ　ふり出せ　赤奴
開所以来変りなく　所で、二の旧家なり
慈悲も情も○○○（家号や業名をいう）
苔のむすまで栄えゆく

ふり出せ　ふり出せ　赤奴
今日の祭のお祝に
大漁満作　重なる目出度だんだんに
町は開けてうれしいな

ふり出せ　ふり出せ　赤奴
千代も変らぬこの家の繁昌
積め　積め　善を
積め　積め　徳を積め

ふり出せ　ふり出せ　赤奴
つめ　つめ　つめ　千両箱（または米俵）
ドッキドメッカイショ
蔵の根引きの折れるまで
ハーレワイサーノサ

ふり出せ　ふり出せ　赤奴
校長さんの頭刈り
ハエコのすべった
ハァー　ドッキドメッカイショ
すべるも道理ハゲあだま
ハーレワイサーノサ　ハーレワイサーノサ

ただし、奴は、その家々の前で即興的に文句を作って祝いを述べていた。例えば、市前呉服店前（田中町）では次のようであったとされる。

ふり出せ　ふり出せ
この家の印は金くつわ
店の繁昌は市の前
主人は福助　お福に呉服
七福揃えて栄えゆく
お目出度いな　目出度いな

※　旧『鰺ヶ沢町史』第3巻（昭和39年）所収。

コラム③ ◆映像の中の白八幡宮大祭◆

平成21年の大祭も無事終了した8月下旬、町中央公民館の倉庫から一本の古い16mmフィルムが発見された。それは、長く所在が分からず、“幻の映像"とされてきた昭和28年（1953）白八幡宮大祭の記録映画であった（その後は、昭和56年にも記録映画が制作されている）。

昭和28年の大祭は8月14～16日の日程で行われたが、この年、鰺ヶ沢町公民館（合併前の旧町公民館）では大祭の記録映画を制作。撮影は、西地方教育事務所の岩井佐平が担当した。映画は、大祭の準備風景に始まり、まだ未舗装だった道路を進む神輿行列、山車と踊り、漁港での大漁祈願祭、海没者慰霊祭などを記録。町中ごったがえす見物客の姿や、奉納相撲、駅伝競走、獅子踊り、発動汽船によるレースなど協賛行事のにぎわいをとらえている。映画の中は、なつかしいあの顔、あの風景であふれていた。また、当時の町並みや風景を克明に記録しているところも特筆される。

大祭の映像記録としては最古のものであり、貴重な歴史資料の発見は、町民の間でも大きな反響を呼んだ。あれから半世紀たった平成21年は、大祭の“これまで”を振りかえり、また“これから”を考えるうえでも、大切な一年となったようだ。

白八幡宮の鳥居を出る御神輿。沿道には多くの見物客であふれている（記録映画の一場面）。上は発見されたフィルム。

港町・鰺ヶ沢 歴史マップ

明和地震供養塔

明和3年（1766）の大地震で亡くなった人を供養した宝篋印塔。兵庫産の御影石を使って作られ、船で運ばれたもの。延寿院（富根町）に所在。

天童山館跡

中世の城跡であったとされる。鰺ヶ沢の港町が一望できる高台にある。

岩木山の眺め

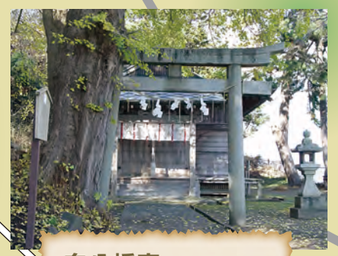
鰺ヶ沢港埠頭から望む岩木山の眺め。山と海とが一緒に視界に入る名所。

御仮屋跡

藩政時代、殿様の宿泊所として設置された。また港町を治める町奉行所も置かれていた。手前の浜が船からの荷揚げ場であったとされる。

鰺ヶ沢の町並み

漁師町の通りには戦前頃の家屋もあり、昔の雰囲気を感じることができる。路地を抜けると新地町（旧遊廓街）に出る。



白八幡宮

鰺ヶ沢の総鎮守として、地元はもとより、諸国の商人や船主の信仰を集めた。玉垣や船絵馬など、北前船交易に関する多数の文化財が残されている。

日和山

奈良時代、阿倍比羅夫が沖を眺め、北海道に向けて出航したという伝説の地。岩木山そっくりの大きな石がある。

白八幡宮大祭

発行日	平成22年（2010）8月20日
編集・発行	白八幡宮大祭実行委員会（事務局：鰺ヶ沢町中央公民館内） 〒038-2792 青森県西津軽郡鰺ヶ沢町大字本町209-2　TEL.0173-72-2859
構成・デザイン	株式会社 RAB企画 〒030-0113 青森県青森市第二問屋町3丁目2-35
印刷	長内印刷 鰺ヶ沢町大字本町20-2

写真・資料等提供者（順不同・敬称略）

古舘彰一　上田幸悦　松江善造
桜井冬樹　白戸清光　武沼博子
冨田重次郎　種田清作　月永理平
田澤誠一　菊谷尚久　三ツ谷信作
竹内光昭　清野耕司　工藤健
白八幡宮
鰺ヶ沢町教育委員会
青森県立郷土館
弘前市立弘前図書館

表紙イラスト・題字／加藤典子

このほか、制作には町内の多くの皆様からご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

本書は工藤等（白八幡宮宮司）監修のもと、中田書矢（鰺ヶ沢町教育委員会主任学芸員）が編集を担当した。なお本文は、神社の歴史や行列・祭典等に関する解説を工藤が、その他を中田が執筆分担した。